Close-up クローズアップ寺院

私は長い間、好きなことをやらせていただきましたから、檀家の皆さんにご恩返しをしないと…。

新潟県三条市
法王山
極楽寺

「この格好で大遠忌に駆け付けたかったんです」

藤田坤士 住職
（ふじた・こんし）
昭和十九年（一九四四）、新潟県三条市の極楽寺住職、藤田説量・智夫妻の長男として生まれる。同四十一年、中央大学法学部卒業。同四十九年、知恩院にて伝宗伝戒。同年の浄土宗開宗八百年記念慶讃事業にボランティアとして奉仕。極楽寺勤務の他、新潟市内のビル管理会社に奉職し、平成三年、常務取締役にて退職。同十九年七月、極楽寺第二十八世住職を拝命（翌二十年十月に晋山式）。同十八年十月より保護司、同二十年四月より新潟刑務所の教誨師を務める。

● 金物の町、門前町の三条

極楽寺のある三条市は、新潟県のほぼ中央に位置する。刃物や金属加工業で栄えてきた「金物の町」だ。市内には小さな町工場がひしめき、人口当りの社長の数が日本一多い所だといわれている。街中を歩くと、近年〝ご当地B級グルメ〟として有名になった「三条名物カレーラーメン」の幟が目につくが、この料理は、高度経済成長期に繁忙をきわめた三条の町工場の人たちが出前食として愛用し、郷土メニューとして定着したものだそうだ。

三条はまた門前町でもある。市内には鎌倉期に創建された法華宗陣門流総本山本成寺があり、中心部には江戸期に開創された真宗大谷派三条別院が大きな伽藍を構えている。越後地方は親鸞聖人が配流された土地で、真宗門徒が多い所だが、「御坊さま」の愛称で親しまれてきた三条別院は真宗大谷派の東北六県の拠点寺院で、県内外から多くの参拝者が訪れる。このため、門前に「本寺小路」とよばれる繁華街が生まれ、門前町がつくられた。

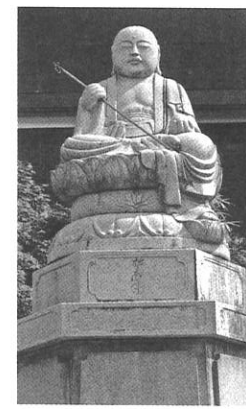
極楽寺は、その賑やかな繁華街の一角に建つ市中寺院である。

● 江戸期に三条へ移転

極楽寺の開創は室町時代の永禄年間（一五五八～一五七〇）、開山は稱譽宗感上人で、当初は三条から十キロ余り南の見附にあったそうだ。江戸時代の天和元年（一六八一）、三条別院が創設される九年ほど前に現在地に移転したと伝わっている。

藤田坤士住職は当時の事情を次のように語ってくれた。

「江戸時代になって信濃川の舟運が盛んになると、三条は物資の集積地として発展するよう



参道わきにある「子育て永命地蔵尊」昭和8年、当山第26世・説栄上人の晋山記念に、当時の大本山知恩寺・宮沢説音法主の肝入りで建立された。毎年6月に例祭を行っている。

たから、檀家の皆さんにご恩返しをしないと…」と言う。

若い頃は厳父との葛藤もあり、大学卒業後は、東京で司法書士事務所に勤めたり、甘栗の販売に従事したりした。三十歳で僧侶資格を取り、新潟に帰ってきてからもビル管理会社に就職し、常務取締役まで勤め上げた。その後しばらくは議員秘書を務めたそうだ。

「私は宗門の大学を出ていませんし、僧侶としての勉強も中途半端です。しかし、寺の中だけで生きてきたなら体験できなかった世の中の面白さ、せつなさ、難儀さ、あるいは企業経営者の孤独さ、大変さ――そういったものは、多少学ばせていただいたと思います」と語る。

●宗教者として

檀信徒教化について藤田住職は、「何もしていません。日々お檀家へ参上して、できれば日常勤行を一緒にあげ、お茶飲み話に花を咲かせています」と言うが、気さくな語り口に細やかな心づかいを示す住職との会話を、楽しみにしている檀信徒は多いに違いない。毎月、檀家に配られる便りにも、行事案内とともに念仏を勧める住職の率直な言葉が添えられている。

宗教者としての手本を尋ねると、清貧を貫き神の愛を示したカソリック僧、アッシジの聖フランシスとマザー・テレサの名を挙げ、「彼らに涙しない者に宗教を語る資格はない。法然さまも墨染めの衣に、粗末な袈裟をしていたじゃないですか」という言葉がこぼれた。藤田住職の心底には〝本物の求道者〟への強い憧憬があるようだ。

藤田住職は平成十八年に保護司となり、同二十年からは教誨師の仕事を引き受け、現在、月に一度、新潟刑務所を訪ねて釈

香積寺での「二祖対面」に参列した藤田住職夫妻

になります。また鍛冶を中心に工業も発達し始めました。そうした新興都市の芽生えのあった三条に徳川幕府も関心を寄せ、町を整備し、この辺りに寺町をつくったわけです。その時、政治的な配慮から浄土宗の寺院を置く必要があり、極楽寺が呼ばれたんだと思います。そして宗門改や年頭法要の取り仕切りなどを任せた。昔は葵の御紋の御駕籠を待って、諸行事が始まったと聞いています」

正面の本堂は、明治13年の大火災の後、同45年に再建されたもので、平成７年に改修を行った。

こうして極楽寺は、三条唯一の浄土宗寺院として歩み始めたわけだが、度重なる火災に遭って、その後の歴史は不詳である。明治十三年（一八八〇）、「上町糸屋火事」と呼ばれる最後の大火で三条市街がほぼ壊滅したとき、極楽寺も再び諸堂を焼失。その後は長く仮本堂で法要を勤め、明治四十五年、法然上人七百年遠忌の翌年にやっと現在の本堂が再建されたそうだ。

●様々な仕事に従事して

藤田坤士住職は極楽寺第二十八世に当たり、昭和十九年（一九四四）、先代住職の藤田説量上人の長男として生まれた。

説量上人は大正八年（一九一九）に生まれ、幼くして極楽寺の養子となった叩き上げの僧侶で、昭和十四年、二十歳の若さで住職に晋董。昭和三十九年に浄土宗宗議会議員に当選し、翌四十年には知恩院の執事に抜擢され、以来十八年間、浄土宗や知恩院の要職を歴任した。特に昭和四十九年の浄土宗開宗八百年記念慶讃事業では知恩院の事務を取り仕切り、知恩院副執事長を務めて退任した。地元でも民生委員や保護司を長く務めた名士だったそうだ。

代替わりは三年前のことで、藤田住職は「私は長い間、好きなことをやらせていただきまし

放間近の人たちに一期一会の講話をしている。

「この私も、運や縁によっては、塀の向こうに転がり込んでいたかもしれないという思いが基本にあります。『もう二度とここに戻ってこないでくださいよ』とお願いしているわけですが、『あの坊さん、あんなこと言ってたな』と思い出して再犯を思い止まってくれればと、毎回工夫をしています。やりがいを感じますね」

御本尊の阿弥陀如来像　像高五尺二寸（1・58メートル）と大きい。

● 寺の子のDNA

今年五月、藤田住職は浄土宗大阪教区主催の中国の香積寺を訪ねる旅に参加し、善導大師像と法然上人御影ご分身との「二祖対面」を目の当りにした。

「思わず熱いものが込み上げてきましてね、これはDNAだと思いましたね。浄土宗の寺に生まれて、お仏飯で育てられ、小さいときから父に『阿弥陀経』を仕込まれた人間ですから…」

来年の法然上人八百年大遠忌には、四月七日に近隣の二ヵ寺とともに知恩院に団体参拝をする予定だ。

「僕は『皆で念仏行脚の格好をして行こう』って提案したんですけど、反対されましてね」

大遠忌に向かって弾む心も、藤田住職のDNAから生まれる自然な感情なのだろう。

取材・文＝編集部（泰）

新発田市の浄土宗三光寺には、明治18年から38年にかけて新発田刑務所で獄死し、引き取り手のなかった73名を埋葬した合同墓があり、毎年お盆に新潟刑務所の人たちの墓参がある。新潟刑務所の教誨師をつとめる藤田住職も今夏、三光寺を訪ねて念仏回向を捧げた。左は三光寺の山崎全昭住職。